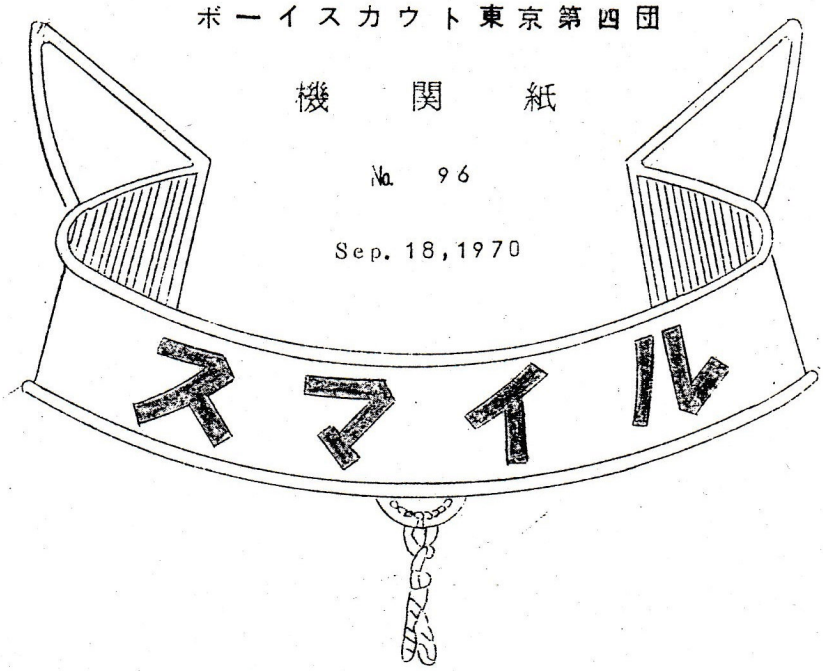
ボーイスカウト東京第四団

機関紙

No. 96

Sep. 18, 1970



世界ジャンボリーを終えて

ボーイスカウト日本連盟
青年隊々長　今田　富士雄

世界八十九ケ国、二万三千人のスカウトが参加して開かれた、第十三回世界ジャンボリーは、八月十日にその幕を閉じた。

相互理解のテーマのもと、グリーンジャンボリーの愛称で呼ばれたサイトも、十九号台風の余波を受けた暴風雨が、三日二晩荒れ続け、タイフーンジャンボリーの異名を得た程であった。アリゾナの一年分の雨量を一日で経験したスカウト達も、サイト内の大洪水により約半数が避難したが、（過去十二回のジャンボリの内初めて）イギリス隊の大部分は「いゝときに台風がきてくれた。どんな悪条件にも耐え、規律正しい生活を送れるのが真のスカウトだ。これも訓練の一つ」と元気にがんばり通した。たゞ一つ残念な事には、過去五回の日本ジャンボリーのパレードにご臨席頂いた、皇太子ご夫妻が今回は会場のご視察にとゞまられた事である。

世界ジャンボリーの起りは、BP卿がブラウンシー島実験キャンプ十周年記念行事を一九一八年に計画したのが、大戦の為延期され一九二〇年に第一回大会が開かれた。日本からは第六回を除き毎回参加、四団からも第十回から連続参加している。

今回特筆すべき事は、新興アフリカ諸国の参加であり、二十ケ国百二十名の旅費を日本が負担したが、日本での開催を強力に支持してくれたアフリカ諸国に対する友情の表れとして大きな意義があった。

今回のジャンボリーには、四団から十名近くのスタッフを行事運営の為に参加したが、大会の影の功労者として感謝の意を表したい。

第13回世界ジャンボリー報告

青年隊　内藤　正樹

◎日　程

8月2日（月）
午後　開会式

8月3日（火）
午前　ワイドゲーム
午後　選択行事
（夜）サブキャンプ内の隊交換宮火

8月4日（水）
午前　選択行事
午後　選択行事　2時頃からパラパラと雨が降り出し、6時頃には雨風が強まり、サイト内のコンディションは悪化してきた。そのためサブキャンプエド内の派遣団の大部分は避難所に退避した。

8月5日（木）
風雨が弱わらないため、キャンプインするのが不可能、退避続行、（他のサブキャンプ派遣団続々、退避）

8月6日（金）
相変らず風雨が強くキャンプイン、不可能、本日の行事関係すべて中止（一部延期されるものもある。）

8月7日（土）
午前　晴天になり、退避した派遣団のキャンプイン始まる。
午後　選択行事、ビックパレード（6日に行なわれるはずだったもの）（夜）インターナショナルアリーナショウ。

8月8日（日）
午前　宗教儀礼
午後　選択行事、日本の夕べ（4日に行なわれるはずだったもの）
（夜）サブキャンプエド全体の大宮火

8月9日（月）
午前　選択行事
午後　選択行事　（夜）サブキャンプエド内の派遣団隊長、副長だけのお別れパーティー。

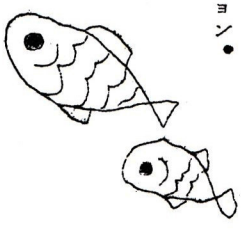
8月10日（火）
午前　選択行事
午後　選択行事、（第4団の見学者達が来た）一部の派遣団の徹宮始まる。
（夜）閉会式

◎選択行事の内容

◎スキル、オ、ラマ……中央広場に特設された小屋施設等で、スカウトが個人あるいはグループで、押し寄せる観衆を前に、特技の披露、作品の展示、製作法の公開等を行なう。

○ジャングルトレール
○クロスカントリー
○オリエンテーリング……5～6人で1チームを組み、会場付近の原野の予め地図上に指示された地点を、シルバーコンパスと地図をたよりに、早く通過してゴールするゲーム。

○ハイキング、○自然観察　○ボート、カヌー。○魚つり　○洋弓、和弓、○水泳、○バレーボール、バトミントン　○トランポリン
○柔道、剣道、○すもう、○ワイドゲーム、○富士登山　○日本の歌おどり、○フォークダンス　○エキスカーション。



○第4団の参加スカウト（8名）

遠藤斗紀雄　坂井　宏
守戸　修　龍　茂久
遠藤友紀雄　杉田英彰
龍　忍　御堀直嗣

○第4団からの奉仕者（9名）

・GHQ奉仕者（4名）
北原陽介　飯泉和行
小松正太郎　宇田川淑明

・SHQ奉仕者（4名）
片岡　孝　百塚健一
内藤正樹　杉田憲彦

・CHQ奉仕者（1名）中央派遣団本部
原　陽一

第13回世界ジャンボリー

年長隊　杉田憲彦

僕はこの世界ジャンボリーに、ホスト・コーブとして参加した。ホストコーブの役目とは、期間中、外国隊の接待をする事であった。僕は、ハワイ隊の1315隊、40名の接待をした。

ジャンボリー前のうち合わせで我々は、リーダーからいろいろな注意を受けた。そしてそれは、お国柄によりだいぶ違っていた。ヨーロッパ、特に英国などでは紳士と言う事が強く言われ、毎朝、ひげそり、くつみがきをしていけという事、低開発国では30才前後で大臣位になっている者がいるから礼儀作法に特に気をつける事、飲酒、喫煙なども国によって許可される年令が違うから気をつける事、その他、全体にわたって言葉使いに気をつけるなどといろいろ注意された。これではすぐ精神的にまいってしまいそうな気がした。

しかし、実際に隊についてみると気にするのは最初のうちだけ。特にハワイ隊などは、大臣の心配は全くなかった。言葉使いも若いリーダーにイエスサーなどとサーを使うといやな顔をした。それで、もっぱらイエスとかヤーで通した。こっちもその方が親しみが持てて良かった。ハワイ隊には、二世、三世、四世、などがいて、多少日本語もできるのでよけい親しみがもて、すぐ友達になった。しかし、彼らに英語を話すと、日本人に英語を話しているみたいでいらいらした。彼らのほとんどは日本へ来たのは、はじめてだと言う事だったが、日本名で名前がついている者が多く、純アメリカスカウトとも、気を使う事なくつき合えた。

暴風雨に襲われた時、ハワイ隊は避難した。それで僕は彼らについていった。一泊目は、本部が何とかしっかりとしていたので、大した事もなく無事にすんだ。二泊目、これは、予定外であったので、ひどい目に合った。本部は、全く頼りにならずだった。僕達は、御殿場の小学校へ行ったのだが、そこに、日本隊約二十名、外国隊約三百三十名がはいった。しかし、本部員が一人もいなかった。いたのは僕を入れてホストコーブが七人だけ。本部に連絡をとったら知らん顔された。我々は晩飯のあてもなく困っていた。幸いにも、婦人会の人が握り飯を持って来てくれた。それで、何とか腹ごしらえができた。毛布も自衛隊が持って来て

てくれた。我々ホストコープは、一泊を無事にすごすため、人員の確認をし、食糧と毛布を配給し、シャワーなどの面倒も見て、一人で約50人のスカウトの世話をした。前に記した事は、本来、本部の方ですべき仕事であって、我々ホストコープのやる仕事ではなかった。全くあきれたが、とにかく我々は最善を尽くす事にした。しかし、当然外国隊からは不平が出る。コロンビアなどは、知らないうちに3人ホテルにとまりにいっちゃうし、ドイツはもうサイトに帰らないってごねるし、ハワイは、町へ遊びに行ったまま12時頃まで帰ってこないし、とうとうまともに休めず、我々は職員室にごろねをした。翌朝、帰れる事になって、ほっとしていたら、校庭で遊んでいたアメリカのスカウトが大けがをするし、バスに乗ってやっと会場に帰って来たら、バスが会場の中にはいれないと言う。それで、おりてサイトまで歩くと言ったら荷物が重いって文句を言って、半分けんかごしになって30分かけてやっとバスから降ろす、という何もかも悪い夢でも見ているみたいだった。

でも一つ感じた事は、こう言う時にもよくお国柄が表われていると言う事だった。避難前、一泊の用意だけをして避難すると言ったのに、アメリカ本土の隊、それにコロンビア、ドイツなどは荷物を全部持って来ちゃった。小学校にいた時も、アジア系の国は早く寝たのに、アメリカ、ヨーロッパ系の国は夜おそくまでさわいでいた。やっぱり似かよった民族はいいなあとつくづく思った。

このように、ジャンボリーの事をふりかえってみると、楽しかった事なんて何もないみたいで、苦労した事や、いやな事ばかり思い浮かんで来る。二度とこんな役目はやりたくないと思ったが、これらの経験が非常に貴重なものとなったのは事実だと思う。これから先、おそらく二度と味わえないだろう。しかし、これらの経験を生かす時は、必ず来ると思う。それも近いうちに。

又、外国に多くの友達を持った事は、僕にとって、最大のそして、最も嬉しい収穫だった。

年長隊　遠藤　斗紀雄

私は出発の前日、体が不調でした。出発の日、新宿の西口駐車場から出発。私は去年の経験から、かなり石等で地理的に恵まれていないと思いました。現地についてみると、草がほどよくはえていた。

さて、開会式は盛大だと思っていた。しかしあんまりパッとしなかったみたいだ。

私はキャンプサイトからアリーナまで近いので毎日行っていた。数日後、日本の夕べをやるときがきた。昼間は弟とカナダのボーイスカウトと他のサブキャンプをまわっていた。午後3時頃、雨が強くふってきた。食堂にあまやどりしていると杉原さんと、もとカブのデンマの荻原さんたちがいた。夕方になって食事前、日本の夕べのリハーサル、SHQ、それからアリーナへ、アリーナで2列になって風船をあげる予定であった。

少しきりがかかったと思うと小雨がだんだん強くなってきた。先頭から2列にならんでいろとのこと、しかし私たちは雨具なし、その為ビッショビショ。先頭は私ともう1人、高2の川崎の子であった。2人、

こういうところでは友情が強い、そこで「2人してニゲルカ」というと彼もO・K。おおいそぎでSHQの前の公衆電話へいちもくさん。彼が「オイ、今日の夕食はスキヤキだ、またかけだして、サイトへ行こう。しかしもう一度確認しよう」確認後、こんどは台湾のサイトでひと休み、一般のお客さんも数人。すると台湾のリーダーが他のスカウトから雨具、きがえ等をもってきてくれて、かしてくれました。

ぼくたちはいそいで一路自分のサイトへ。たしか今日の夕食はスキヤキ、もう10食もご飯をたべていませんでした。しかしご飯もスキヤキもカンズメでした。

さてキガエ後、夜テントがきつく、定員オーバーの為、ぼくはフライの下でイスをくっつけてねた。雨と風が刻々と強くなりました。HM11時ごろ隊長がきて「よければぼくのテントへこないか」とさそわれました。しかし、めんどくさかったので、がんばりますといってまたねた。2～3時間後「大変ですよ」とあるスカウトの子がきていった。目をあけるとフライに水がたまっていた。またスカウトの子がきて、少しかいだしていった。かなりたまっていました。

忘れもしないAM1時15分。ゴオーバリ、ガシャン！スゴイ音、その後すぐに目をあけるとフライが雨水で、ポールがオレてしまいました。その後、食料テントへにげこみました。そしてまたねました。以後、数日そのようなわけであらしでした。

5名以外は避難したんですけど、ぼくはるすばんをしました。近くのシャワーの水の流れる所がいつも30センチメートル位なのに、1メートル位にも時にはなりました。

その後、イスをかこんで各国の人と歌をうたいました。翌日はサイト整理、翌々日は洗たく。その後は平凡な日々でした。

そして閉会式、聖火隊、そして花火、その後のアリーナでの別れは今でもはっきりとおぼえています。

世界ジャンボリー見学記

年少隊　三淵啓自

八月十日　日本ジャンボリーに行って心に感じた事は、終りがないようにつづく国旗の行列や江戸区の山の上から下を見たキャンプ場たくさんの国旗や、のろしがあがっていて、色とりどりのテントが、一面に花がさいた様に美しいのを見て、会場は思ったよりずっと広いと感じました。

全国のスカウトが行進してるのを見るとみんなの手足がそろって居て、とてもぼくたちには、まだできない事だと思いました。

それに火祭で最後の方で、形がみこしの様なものをもやしてる時、ぼくは美しいなと感じました。最後の花火は本当にきれいで花のように丸く広がる花火、空の雲の色が、赤黄青緑の色にかわる花火は、ぼくの心の中に今でも残って居ます。

ぼくは、言葉のちがう、各国からこんなに大ぜいのスカウトが、集まり仲よく同じ行動をとってたのしい集会をする事がどんなにむずかしいことかとつくづく感じさせられました。

日本国内でも、きどうたいと、でもたいがたたかっているのに世界がいっしょになるという事を考えると、スカウトのいだいな力におどろきました。

各隊キャンプ報告

年少隊隊長　片岡　孝

第十三回世界ジャンボリーがはじめて日本の地で行なわれたことし、それに先がけ七月二十一日（水）から二十四日（土）に同じ富士の裾野にある富士五湖の一つ西湖においてユースホステルを利用してボク達の夏季舎営を行った。リーダー九人、スカ

ウト二十九人が参加し、又お手伝等で二十人位の御父兄も参加された。

近くには青木ケ原樹海やめずらしい植物や野鳥、昆虫が多く、又鳴沢の氷穴、富岳の風穴、こうもり穴などがあり、普段スモッグや公害の多い東京に住んでいるボク達はおおいに自然に親しみ、楽しい舎営をおくってきました

今年は新人スカウトが半数以上占めていたので、こうもり穴を探険したり、東海道自然歩道を歩いたり、ロッククライミングをして自己の勇気と耐久力を認識し、又ゲームや組集会を開いて皆と協力するという事の大切さを覚えてきました。そして修得科目に挑戦し、多くの完修者が出ました。

帰りは富士山の五合目までバスで登り、はじめて雲海を見ました。本当に富士山は日本一の山です。ボク達もはやく立派なスカウトになり、富士山のようなたくましいスカウトになりたいと思っています。

カブキャンプの思い出

根本行久

ぼくはカブのキャンプから帰ってきた時ソファーの上でねっころがりカブのキャンプのことを思いだした。まずむこうについた時「古いなあ。こんなに古くちゃかんじがでないや。」と思って中に入って見わたしてみるといがいにきれいだった。

「ぼくたちのへやは、何号室だったっけ。」と思った。そのうちに「そうだ、二〇三号室だ。」と思いうかんだ。ぼくがねた所は、二だんベッドの上だ。百瀬君が欠席したので、ぼくがだい理の次長になった。もう一つわすれてしまったことがある。それはいつ次長しようをもらったかだ。十分ぐらいして思いだした。それは、二日目か三日目かのどちらかだ。そのわけは、一日目はだれももらわないし、四日目は、ぼくはもらわなかった。のこるは二日目と三日目だ。一番楽しかったのは、キャンプファイヤーだった。中でも一番おもしろかったのは、一組のげきだ。デンチーフの西家君がひとの頭をぶつときがおもしろかった。リーダーたちのげきもおもしろかった。一番おもしろいのは、遠どうくんの弟の方だ。去年も女役をやったと思う。なぜこんなに女役やらすのかなあ。たまには、勇ましい役をやらせたほうがいい。歌は、どうさのあるのが多かった。でもとちゅう雨がふったので残念だった。帰りに富士山に登った。雲海がきれいだった。

少年隊キャンプ報告

副長補飯泉和行

本年度の少年隊夏季野営を、八月十八日より二十一日まで、南伊豆は下田市田牛で行った。サイト選定難、第十三回世界ジャンボリーの開催、柳隊長の渡米の為不参加等、悪条件が重ったが、幸にも、片岡CS隊長、宇田川同副長補の応援を得て無事終了することが出来た。

今回のキャンプは、当初より〝楽しいキャンプに〟を主眼に置き、美しい海岸、しかも釣の名所という地理的条件を生かして、サンドスキー、鯵釣、水泳等のプログラムを用意して行った。

砂の斜面を、プラスチックの波板にのって、気持好さそうに滑ったり、十cm位の鮎を一人で二十匹も釣り上げたり、ブーとふくれたフグを水に戻すと、風船がしぼむ時の様にシュルシュルッと飛び廻るのを見て驚いたり、かなり所期の目的を果せたのではないかと思う。他に、強風下のフライ張り、ダンバー作り、バーベキュー、鮮魚の調理法等もよい経験であったろう。

然し乍ら、スカウト総数の少なさを反映して、参加スカウトが十三名であった事は、

彼等自身にとっても淋しかったようである。

最後に、サイトを御紹介下さったOS父兄の三淵さん、現地で御世話頂いた渡辺さん、隊長代理を引受けて下さった片岡さん。他諸氏の援助、その他御指導、御協力を下った方々に対し、紙上を借りて厚く感謝致します。

夏季田牛（とうじ）キャンプ

タイガー班　大内　真人

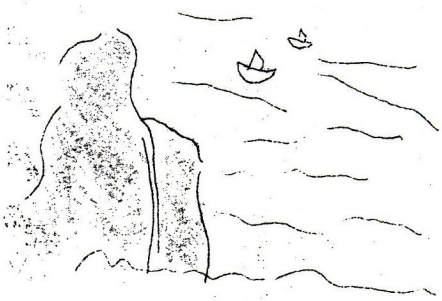
ぼくがボーイスカウトに入いって始めてのキャンプが、伊豆下田の田牛で行われた。生まれて初めてぼくのせなかがすっかりかくれるような、大きいリュックをしょった。

午前八時東京駅南口集合。リーダーは、すごく大きいリュックをしょっていた。それから急行に乗り下田まで行き、そこからバスで田牛へと向った。とちゅうすごくでこぼこした山道を走るので、ガタガタゆれた。サイトに着き、一休みした。それからすぐ、テント、ズームテントをたて、かまどを掘った。みんないそがしそうに働いている。やっと終ったと思ったらすぐ夕食の用意、夕食はすきやきだった。おなかがすいていたので、すこし多く食べた。あとかたづけは、たいへんだった。暗くなったので、きれいには洗えなかった。それから、班営火があり、そのあと、つかれていたのですぐねられた。

翌日六時起床。浜辺までマラソンし、体操。すごくいい気持だった。それから、サイトへもどり朝食。そしてまた、設営をした。その時ごみ穴を掘った。昼から海へ、泳ぎにいった。まず、サンドスキー場で遊んだ。風がすごくて、砂が体に当って、すごくいたかった。海へ入る時は、水がつめたくて、でようと思ったが、せっかく来たのだから入いろうと思って入いった。少しだけ泳いでサイトへもどった。夕食後のナイトゲームは、この前の教会でやったのと同じのだと思って楽しみにしていたら、今度のは、きもだめしだった。なんだかやる前からぞくぞくしていた。でも二人ずつだったのでよかった。ぼくたちは、穴の中の棒が見つからなかったから、出て来てしまった。やってみると別にこわくはなかった。帰ってからすぐねた。

三日目に海づりをした。ぼくは海づりは初めてなのであまりつれないと思ったら、ふぐが十びきぐらいつれた。昼食の時、火がつかなくて、上の方までいって木を拾ってきた。そして三時ごろ、やっと昼食が食べられた。夜キャンプファイヤーがあって各班歌二つと劇一つをやった。楽しかった。帰りに花火を少しやった。

さて帰る日の朝。てつ営でいそがしかった。下田行のバスが三本しか出ていないそうなので、乗りおくれたらその日に帰れないかもしれないからだ。昼食をすまして、バスに乗り下田。帰りは指定席だった。家に帰ってから、つかれが一ぺんにでた。なんだか三泊四日が、すごく短く感じた。ボーイは、カブよりきびしいことは知っていたけれど、事実であった。しかし皆きびしい道を径てきたのだから、ぼくもがんばらなくてはと思う。



報告行事

八月十四日‖ボーイスカウトOB会
麻布のグリーン会館で、現役も含めて三十一人が集まり、ビールを囲んでの楽しい談笑の時間をもつことができました。その際、四団特製の綿シャツをたくさんの方がお買い求め下さいました。誌面にてお礼申し上げます。

九月　四日‖合同キャンプファイヤーが例年のごとく教会の庭で行われました。元デンマザーのお顔がみえて、大変なつかしく思いました。

リーダー紹介

カブ

宇田川　淑　明　副長補
進藤　まり子　〃〃〃
神沢　静　江　〃〃〃
須賀原　裕　子　〃〃〃
遠藤　節　子

十一月六日（土）
教会の庭で
バザーが
あります。

皆様
おさそいあわせの
うえ、ぜひ
おいで下さい。

＜編集後記＞

長いことねむりつづけていた「スマイル」もやっとほほえみをとりもどして皆様におめにかかれるようになりました。
ねむっている間にいろいろなことがありました。カブは、若い女性リーダーがふえ、隊長たちはニコニコ、OB会が発足して、四団の行末をたのもしくみまわしていてくださっています。そして世界ジャンボリーが日本で開かれました。
もうねむっていることができません。あちこちで「スマイル」を呼んでいます。
さー　マラソンからはじめよう。耐久力をやしなって少しづつでも前進しよう。
今回のスマイルは非常にかぎられた時間であわただしく皆様に原稿をお願いし、どうにか皆様のお手許にお届けできるようになりました。ご協力をいただいた皆様に心より感謝いたします。

スマイル　第九十六号
発行日　昭和四十七年九月十八日
編集人　杉　原　正
発行所　港区赤坂一ー三ー一ー六
日本ボーイスカウト東京四団